カレッジ・ソング雑感

——日米文化交渉史の一断章——

麻田貞雄

岩倉に居を構えてから、かれこれ十五年になる。近くに同志社の下宿生や寮生が多い。彼らが飲んだ勢いでカレッジ・ソングを放歌高吟して散策するのも、青年らしくてよい。ただ、あまり非常識な時間に「ワン・パース」とやられると、近所迷惑にもなり気を遣う。しかし、「うるさい、止めろ」とどなりつけるのも無粋で非教育的だ。そういうときは、窓から「発音が悪いゾ！」と一喝するに限る。途端にシーンとなる。

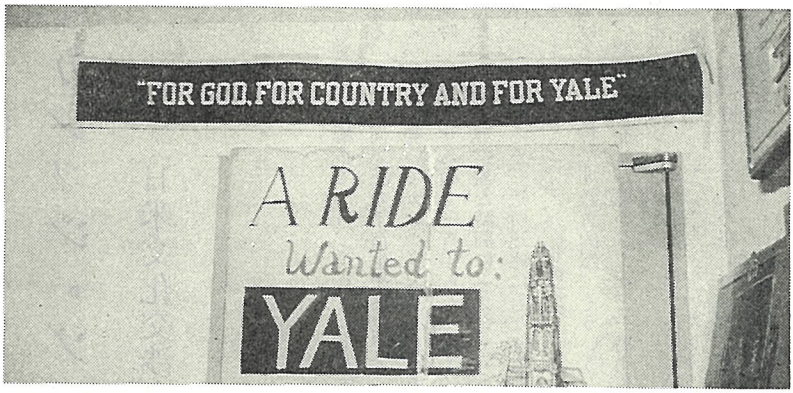
「放歌高吟」といっても、わがカレッジ・ソングは「紅燃ゆる丘の花」のように弊衣破帽で下駄をカラン・コロンと響かせて逍遥するタイプの歌ではない。むしろ、軍靴を轟かせて勇ましく行進する「軍歌」に属する。

このことは私の岩倉高校時代、漠然とだが生徒の一部に知られていた。すなわち、ドイツ帝国の旧い「国歌」だったとか、ナチスを描く映画でこの曲が出てきたとかいう類の情報である。しかし、カレッジ・ソングは——他の多くの同志社の伝統と同じく——神聖にして侵すべからざるものとされており、先生に尋ねるのも何となくはばかられた。

私が「真相」をはじめて知ったのは、高校を卒業してアメリカのカールトン・カレッジに留学して間もない時である。親しくなった牧師さんに、これが自分の学校の校歌だと得意満面で披露に及んだところ、彼は顔色を変えて「それは、きわめつきのドイツ軍国主義の曲だ」と注意してくれた。カール・ウィルヘルムの作曲になるこのドイツ国歌の名称は、〝ラインを越えて〟というのだとも教えてくれた。(勿論、正確には〝ラインの守り〟というのだが、ナチスの迫害を逃れてアメリカに渡ってきたドイツ人牧師のこと、若干の誇張は理解に難くない。)

カールトンを卒業してイェール大学の大学院に進学した私は、ここでもまたカレッジ・ソングについて意外なことを発見する。ニュー・ヘイヴンの町に到着早々、下宿の一室でラジオの〝イェール局〟(イェール大学の学生放送局、大学周辺なら聞こえる)に周波を合わせたところ、何となつかしい同志社ソングが流れてくるではないか！　私は条件反射的に「起立」してしまった。だが、よく聞いてみると、どうも同志社カレッジ・ソングと歌詞が違う。早速イェールの先生に尋ねてみると、これは〝Bright College Years〟(輝かしい大学時代)というイェール校歌とのこと。

何のことはない。イェールの校歌こそ、軍国主義ドイツの「国歌」からメロディーをそっくりそのまま借用し、それを同志社が「ま



イェール校歌と若き日の放浪の記念

た借り」の形で拝借したというわけだ。(その間の事情は『同志社九十年小史』に詳しい。)[1] わがカレッジ・ソングについて、もはや肩味のせまい思いをしなくてすむと思うと、うれしかった。

さて、歌詞の内容を比べてみると、イェールのそれが無邪気そのものであるのに対して、わがカレッジ・ソングのほうは崇高な理念と理想に満ち満ちている。しかし、やはり同志社カレッジ・ソングはイェール校歌から一部借用している。後者の最後のスタンザは次のように結ばれている——"For God, for Country, and for Yale!" この言葉を借用しつつ、わがカレッジ・ソングでは一部「改善」している。そこでは "For God, for Doshisha and Native Land" となっており、「祖国」よりも前に「同志社」をもってきているのは意味深い。その後、昭和時代に入り、政府官憲による同志社弾圧、そして勇気ある教授の「抵抗」という歴史の流れにかんがみるとき、まさに予言的とすらいえよう。

それと対照的にイェール大学の歴史は、「祖国」を「母校」に優先させることの危険性を物語っている。歴史家として興味をひかれる一例をあげておこう。周知のようにアメリカは一八九八年四月、スペインとの戦争に突入、五月一日にはデューイ提督が「マニラ湾の闘い」で劇的な勝利をおさめ、アメリカの国民世論は興奮の坩堝と化した。当然イェール大学も愛国心に包まれた。大集会が開かれ、そこであの英雄的な曲のイェール校歌が「特筆されるべき役割」を演じることになる。「イェール大学の歴史上けっして忘れられない」この大衆集会に

「イェール関係者——教授陣と学生——は全員出席した。会場に用いられた〝古き教会堂〟は、その通路や、控え室にいたるまで超満員となった。……T・ドワイト総長は〝この集会は大成功だった〟と高らかに宣言した。……何といってもクライマックスは、校歌「輝かしい大学時代」の合唱だった。その音響で〝古き教会堂〟の建物は震動した。そして、その最後のスタンザに達するまでに、大聴衆は大声を張りあげて合唱に加わった。"For God, for Country, and for Yale"——まさにこの最後の歌詞こそ、この大集会の主題であったのだ。」[2]

今日、米西戦争をふりかえって正当化するアメリカ人は、まずいないだろう。当時イェール大学の教授陣のなかには、W・G・サムナーのように反戦の論陣を張る学者もいたのだが、一旦開戦となると大勢は戦争支持に傾く。そして、イェールの校歌も愛国心の高揚のために悪用されたのである。

やたらに歌詞の言葉の順番にこだわるようだが、その理由として二つばかり例をあげておこう。アメリカの政治評論家、雑誌編集者で、相当右寄りながら幅広い影響力をもつ論客に、イェール出身のウィリアム・バックリーがいる。彼は一九五一年、『イェール大学における神と人間』を著わしたが、その本を次の「各位」に献呈している――"To God, to Country, and to Yale *in that order.*" ユーモアとエスプリをきかした「献呈」だが、ナショナリストのバックリーが「この順番で」と念を押して、母校の前に祖国をもってきているところに、彼の面目躍如たるものがある。

アメリカ人の「クロス・ワード・パズル」好きは有名だが、その中にひどく〃反イェール的〃なのがあったので、ここに紹介しておこう。"A great anticlimax"（意訳すると「最たる拍子抜け」とでもなるか）に相当する四文字で埋めよ、というのである。正解は YALE。「その心は」というと、崇高にも「神のため」「祖国のため」と来て、最後に「イェールのため」でガックリ来るというのだ。この悪質きわまるパズルを作ったのは、ハーバード出身で、イェールに対する劣等感の塊のような人物に違いない、と私は今でも確信している。しかし、別の角度から見ると、イェールの校歌も、「クロス・ワード・パズル」に出てくるぐらいだから、大変有名になったものだ、といえよう。

ところで、日米双方とも、その大学歌のルーツをたどれば、中世ヨーロッパの大学までさかのぼる。古典的な「大学賛歌」としては、ラテン語で歌う"Gaudeamas Igitur"が世界的に有名だ。「大学万才！　教授万才！」と、われわれ教師にとって実にうれしい祝杯をあげてくれる。一九世紀になってブラームズはこの曲をモティーフとして「大学祝典序曲」を作曲したが、それを聞くたびに教師としての幸せを感じる。

ヨーロッパの学生歌となると、ぐっとくだけて「酒と女」が中心テーマになるが、「最後のピューリタン」であるわれわれの伝統になじまない。しかし、アーモスト大学に"Amherst Drinking Song" "Come Drink a Toast to Amherst" と、威勢のよい酒杯の歌が二つもあることは注目に値する。[3] われわれも一九世紀ニュー・イングランドの禁欲主義を墨守するだけが能でもあるまい、と思うのだが……。

今日、「国際主義」が叫ばれているが、この観点からカレッジ・ソングを見直してみるのも無意義ではなかろう。同志社カレッジ・ソング制定の経緯について若干つけたしておくと、その作詞者は啓明館やアーモスト館など同志社の古典的な建築を設計したウィリアム・メレル・ヴォーリスだった。ヴォーリス自身はイェール大学出身ではなかったが、一九世紀の末期、同志社にやってきたアメリカ人宣教師の多くがイェール神学校出身であったことにかんがみて、イェールの校歌の曲が選ばれた理由は想像に難くない。

アーモスト大学の校歌は、同志社大学のアーモスト館の正式の寮歌でもある。実に軽妙なメロディーで初期アメリカ史を愉快な形で要約している。Lord Jeffery Amherst と題

するこの校歌は、オーティス・ケーリ教授の努力にもかかわらず、あまり知られていないので、簡単に紹介しておこう。ジェフリー・アーモスト男爵はヨーロッパの「七年戦争」に従軍したこともあるイギリス士官。一七五八年アメリカに赴き「フレンチ・インディアン戦争」でカナダの領土をぶんどるなど勇名を馳せたのち、ヴァージニア植民地の総督に任名された。アメリカに独立戦争が勃発すると、アーモスト将軍はニュー・イングランド地方でアメリカ植民地軍との戦いを指揮することを拒否した。一七九六年、歿する前の年に「元帥」となる。アーモスト男爵の遺徳をたたえて、アーモストの町も大学も名付けられたのである。

アーモスト館生は一九七九年に至るまで、発音の練習にはげみ、Lord Jeffery の歌を合唱したものだ。しかし、その後の〝新人類〟のアーモスト館生は、アメリカの「文化的帝国主義」に反撥してか、この美風をぶちこわしてしまった。

アーモストの他に同志社と友好関係にあった大学といえば、私の母校カールトン・カレッジであろう。一九七〇年、大学紛争によって姉妹関係の断絶に至るまで、カールトンの学生が毎年その卒業生を「代表」という形で同志社に派遣していた。その一人が「カールトン・ハウス」の寮生にカールトンの校歌を教え込もうとしたが、失敗に終わったようである。

たかがカレッジ・ソング、されどカレッジ・ソング、である。同志社・アーモスト、同志社・イェール関係と違って悲劇的な道を歩んだケースもある。たとえば、関西学院の場合がそうだ。おそらく同志社カレッジ・ソングに刺激されたのだろうか、関西学院はプリンストン大学の校歌 Old Nassau をほぼ全面的に借用していた。ところが、この「盗作」の事実がプリンストン当局の知るところになり、プリンストンから抗議状が関西学院に舞いこんだ。こうして関学は、そのカレッジ・ソングもプリンストンとの関係も失ってしまう破目になったのである。(関西学院の名誉のために書き添えるが、現在の校歌はイギリスの桂冠詩人エドモンド・ブランデンの作詞による格調高いものである。)

今、この小文を綴りながら、『同志社百年――永遠(とこしえ)に良心を求めて』というレコード・アルバム(5)におさめられている同志社の数々の歌を聞いている。創立百周年を記念して作られたものだが、なかなか良く出来ている。ほぼ同時に『同志社歌集』が出版されているが、これは楽譜を集めた小冊子にすぎない。この点、イェール大学が出版した *Songs of Yale* は二三〇頁もあり、はるかに充実している。(4) 単に「イェールの歌」にとどまらず、Gaudeamus にはじまり欧米共通・古今の大学歌、学生歌、さらにはアメリカの民謡の類、そして最後に宿敵ハーバードの校歌までいれているのは、あっぱれと言うしかない。似たような歌集が同志社にあったらな、と思う。

私は同志社カレッジ・ソングに大きな誇りをもっている。だからこそ、高校を卒業してから九年間アメリカの大学で学んでいる間も、けっしてカレッジ・ソングを忘れなかったのだろう。馬齢を重ねてしまったが、今でも卒業式でカレッジ・ソングを「全員起立で合唱」する際、感動で胸のつまる個所がある。"Though through the world we wander far and wide"――ここまでくると、私のオクターブは一段も二段もあがる。この歌詞をうたうとき、必ず青春時代の「放浪」と知的

遍歴を改めて想い浮かべるからである。

いつか機会があれば、カレッジ・ソングを通じての日米文化交渉史を書いてみたいと思う。この小文は、そのためのデッサンに過ぎない。大方の諸兄、諸姉の御教示が得られば幸いである。（大学法学部教授―外交史）

（この文章を記すにあたり経済学部の渋谷昭彦先生から多大の資料と御教示を得た。あつく感謝したい。）

（1）同志社社史史料編集所『同志社九十年小史』（学校法人同志社、一九六五年、非売品）、一五三―五四。

（2）George W. Pierson, *Yale College, An Educational History : 1871―1921*, Yale University Press, 1952, p. 21

（3）William P. Bigelow, ed., *Amherst College Songs* (Amherst, Mass., Alumni, 1932).

（4）Marshall Bartholomew, ed., *Songs of Yale* (New York, G. Schirmer, 1953).

（5）東芝レコーズ、一九七五年。

『同志社百年史』について

「通史編」（全二巻）

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部　創業と成育（明治前半期）
第二部　キリスト教教育の受難（明治後半期）
第三部　大学への道（大正期）
第四部　戦時下の学府（昭和前半期）
第五部　再生と発展（昭和後半期）

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粋的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」（全二巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といってよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。
掲載写真　三二五点。
頒価・六、〇〇〇円
送料不要の場合　五、四〇〇円
「資料編」約二〇〇〇ページ。
頒価・一二、〇〇〇円
送料不用の場合　一〇、八〇〇円
発　行・学校法人同志社
取扱い・**同志社収益事業課**
（☎〇七五―二五一―三〇三八）

会津の同志社人

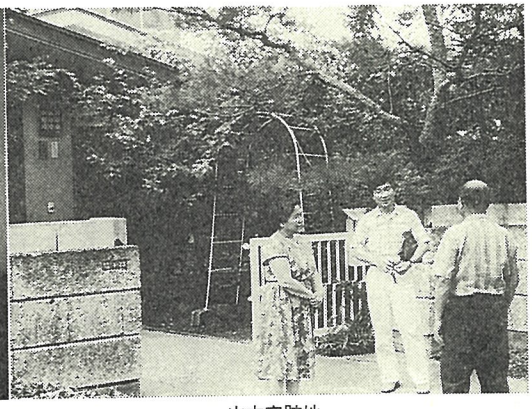
五十嵐勇作

昨秋、松山同志社総長先生一行わざわざ会津に見えられ、山本覚馬・新島八重誕生の地を親しく訪ねられました。その折、ゆかりの地案内の役を致しました故をもって、会津関係の同志社人について述べることに致します。

初めは山本覚馬です。覚馬は一八二八（文政一一）年一月、会津藩士山本権八の長男として、若松郭内に生まれました。その場所は現在、会津若松市米代二丁目一番二三号　宮崎十三八氏宅となっています。

覚馬は藩校日新館で文武を学び、二三歳より二九歳までは江戸にあって佐久間象山・大木喬任らに学び、勝海舟とも交際し、その間、洋式砲術の研究を深める傍ら、蘭学を修めています。先覚者としての卓見は、この頃に養われたと思われます。二九歳のとき会津に帰り、藩校に蘭学所を設け教授となり、三七歳のとき藩主松平容保に従って上洛します。一八六七（慶応三）年十月、会津藩士は大坂へ向うが、覚馬は京都に留まります。翌年一月、鳥羽伏見の戦で会津藩が朝廷に敵する意志のないことを弁明しようとして戦陣に出かけ、薩摩藩兵に捕えられ、禁錮の身となりました。

山本覚馬



山本家跡地

時勢を憂え薩摩藩主に面会を求めたが、出来なかったので同囚の野沢氏に筆記させ、管見と題し薩摩藩主に差し出しました。これがために覚馬の意見は朝議に用いられます。この管見は青山霞村著『山本覚馬』の巻末にも載せてあり、私たちが今日これを見れば、当時の覚馬の先覚的なことに驚くばかりです。

帝都が東京に遷った後の京都のために、京都府顧問となり、次々と京都の近代化に尽力してゆくことは、青山氏の書に見る通りであります。

覚馬が新島襄に会うのは一八七五(明治八)年で、その年の十一月に宣教師J・D・デイヴィスが加わって三人の同志が協力して、同志社が創立されることは周知の通りであります。しかし、ここで注目したいのは、これより前に覚馬にはキリスト教についての理解があったことです。

即ち三年前に京都で博覧会があり、このとき覚馬は宣教師ギューリックらに会っています。その後、ゴードンよりおくられた『天道溯原』を読んでおり、これらは見えざる神の御手のなす業と信じたいのです。

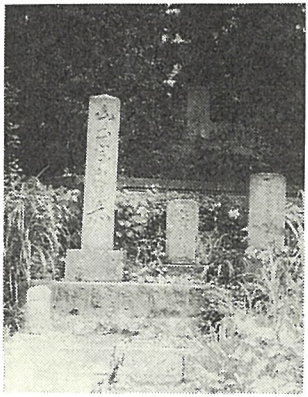
薩摩藩より覚馬に与えられた旧同藩邸跡地を、覚馬は同志社英学校の敷地に譲り、一八七六年に新校舎が落成となります。またこの年は熊本バンドが転入して同志社の第一歩となります。

次に山本覚馬の妹八重について述べます。八重は一八四五年十一月、若松に生まれ、一八七一(明治四)年十月、兄覚馬を頼って京都に出まして、女紅場(後の京都府立第一高等女学校)の舎監に奉職、一八七六年一月、デイヴィスから洗礼を受けて、新島襄と結婚します。八重の受洗は京都における新教の最初の受洗ということです。八重については晩年に語ったことが「新島八重子回想録」として、永沢嘉巳男が筆記し同志社新聞に連載され、戦後に再版刊本されていますので、ここでは会津戦争中の活躍について述べます。

新島八重

それは戊辰の八月より九月にかけて、八重は若松城に籠城しました。女子は炊事や傷病兵の看護に当たっている中で、八重は男装をなし、砲術の役を指揮したとのことを、当時小姓役として同じく籠城しておった井深梶之助は「同志社校友同窓会報第62号」(一九三二年)に述べています。

開城に際し八重が城壁に書いた「明日よりはいづこの誰かながむらん、なれし大城(おしろ)に残す月影」の歌は、有名であります。八重は戊辰後、十四年ぶりに新島襄と共に若松城を訪れ、昔日の戦跡をしのびました。晩年の一九三一(昭和六)年九月には若松郊外の大龍寺にある墓地を訪ね、等身大の高さの「山本家


大龍寺の山本家墓所

之墓所」と記した石柱を建てています。大龍寺では今にその墓地を大切にし、石垣も積んで下さっていることは有難いことです。

次に手許にある『同志社校友会名簿』（一九六五年）により、年次順に述べます。

最初の人は望月興三郎で、一八八七年英学校を卒業しています。望月については『福島県史第11巻』の一五三頁に、明治十五年二月十日大沼郡高田にて自由民権運動のため佐治幸平らと共に演説を行っていることが、記されています。望月は当時、高田小学校教員であったが、辞職し同志社に入学します。今から約三十年前に、私は望月が京都に走ったとの記録の古本を見つけ、今も保存しています。

望月は一九一八年に、「明治の十五年故郷を去て以来、各地萍遊、多くは京阪神の間に在り、神戸は明治三十九年来根拠地として家族を置き、大正四年朝鮮より帰住し、爾来外国貿易業に関与致居れども、根が武士の生まれにて成金にもなれず、碌々塵仙窟に穴居致居候、去夏北陸線にて帰国、久振にて故郷の山川に接し、懐古の情を恣に致候。」（「会津会会報」13号）と述べています。

次は兼子常五郎（重光）で、一八九一年に神学科別科を卒業しています。兼子は一八五八年に河沼郡勝常村に生まれ、一八八〇年栃木師範学校を卒業し、栃木県下で教員をしておりましたが、福島県下の自由民権運動に賛同し会津に帰って参りました。そして喜多方事件に連座し会津地方の民権家として活躍します。詳細は『福島県史第11巻』や高橋哲夫著『福島民権家列伝』にゆずります。

望月の影響を受けたのか、どうかは判然としないが、望月より三年おくれて兼子は京都に至り、同志社に入学します。翌年には新島襄より洗礼を受け、伝道者としての決心を固めました。一八九五年より一九二九年まで、若松基督教会牧師を勤めました。この間に多くの信者を育て、中でも会津中学校の生徒に多くの感化を与え、彼等の中から二瓶要蔵・遠藤作衛・小林美登利などの伝道者が輩出しております。

次は今泉真幸で、一八九一年に普通学校を経て、一八九六年に神学校本科を卒業しております。真幸の父は日新館漢学教師の今泉岫雲で、戊辰後に越後に居りましたので、真幸は一八七一年に越後で生まれるのです。真幸は神戸多聞教会牧師として活躍し、組合教会の要職を歴任、日本キリスト教団成立に努め、戦後は聖書協会理事長として、任期中に口語訳聖書の完成を見たことは周知の通りであります。猪苗代湖畔の聖書学校には聖書協会が全面的に協力下され、自ら講義もして下さいました。著書の中に『新島襄小伝』もございます。同志社入学は望月のすすめによったことをつけ加えておきます。

今泉真幸

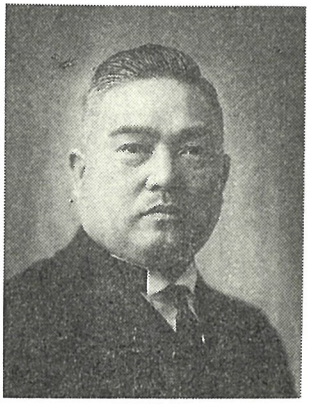
次は高橋正道で、一八九六年に神学校別科を卒業しております。一八七〇年五月に大沼郡北村西兎沢（現・会津高田町大字旭三寄）の山内岩吉の次男として生まれ、幼名は山内鹿三といいました。のち正道と改め一八九八年に岩手県水沢町（現・水沢市）の高橋サンと結婚しました。卒業後、喜多方に赴任し伝

道したほかは、北は函館より西は鳥取までの各教会を歴任されております。また同志社の教科に別科柔道を設けるために努力されました。同志社入学よりの生涯の日記は、同志社に保存されているので、拝見したいと思います。

次は二瓶要蔵で、一九〇七年神学校本科の卒業です。一八四年五月、若松に生まれ、会津中学三年のとき兼子重光牧師より受洗、神学校卒業後は松山・京都今出川（現・洛北）・巣鴨の各教会を歴任し、その間にアメリカとイギリスに遊学されています。一九二六年に感ずるところがあって、東京府下の千歳村にて修道院生活を始められます。戦後は聖ヨハネ教会と聖ヨハネ修道所を設立されました。また個人雑誌『宗教』を一九二三年より戦中・戦後の少しの休刊を除けば約五十年間、通刊六〇〇号まで発行されたのは、同じ若松出身の佐藤繁彦の個人雑誌『ルター研究』と共に、日本キリスト教界の大きな足跡だと思います。一九七六年には同志社大学より名誉神学博士号を受けられたことは、郷土会津の誇りであります。一九八五年に百歳を越えての著作集全三巻刊行された壮挙は故郷の新聞にも報ぜられました。昨年三月の松沢教会においての葬儀には、私は会津高校同窓会を代表して参列した次第です。

二瓶要蔵

次に遠藤作衛は、一九一五年大学神学部を修業されています。一八八九年、北会津郡飯寺村（現・会津若松市門田町）に生まれ、会津中学四年のとき兼子重光より受洗、同志社在学中に向日町で開拓伝道され現在の向日町教会の基を築かれ、また同志社を終えられてから堺教会に赴任されます。一九二二年から二五年まではオベリン大学などに留学され、帰国されてより兵庫と洛陽の教会で牧会に当られました。組合教会の部会長や同志社の教育にも関与されました。ご子息の遠藤彰神学部教授には湖畔聖書学校に何回となく講義をして下さったことは感謝の至りです。


遠藤作衛

次に小林美登利は、一九一六年大学神学部を卒業しております。小林は一八九二年一月、大沼郡田川村佐布川（現・会津高田町）に生まれ、会津中学三年のとき兼子重光より洗礼を受けています。小林はブラジルに渡って、サンパウロに聖州義塾を開き、ブラジル在住の日系人子弟の教育に当たりました。

会津生まれでない方としては、兼子重光の後任として会津若松教会牧師を勤められた松本宗吉、明治大正期に会津中学校教師をされた尾戸長能、の二人をつけ加えておきます。

以上、明治大正期卒業の方々のみとなりましたが、ご参考になれば幸に存じます。

（郷土史研究家）

ウエッブ夫妻と同志社

香川孝三

1

イギリスでの在外研究期間中のある日、ロンドン大学政経学院（London School of Economics and Political Science）で開かれた研究会で、同学院で国際関係論を担当しているイアン・ニッシュ教授が、「イギリスにおける日本研究の現状」と題する発表をおこなった。その中で、同学院の創設者であるシドニー・ウエッブが妻であるベアトリス・ウエッブとともに同志社を一九一一年訪問をしたことにふれた。このとき同学院で学んだことのある同志社の関係者がウエッブ夫妻の世話をしているが、それがだれなのか分からないので、ぜひ知りたい旨をのべていた。研究会のおわった後、私が同志社に在籍していることから、その人物の調査を依頼された。

私自身もシドニー・ウエッブには非常に関心をもっていた。労働組合の実態調査や歴史研究を妻とともに共同研究をすすめ『産業民主制』や『労働組合運動史』という古典的名著を発表しているし、私の在外研究のテーマである「イギリスの植民地に対する労働政策」を研究するうえでは欠くことのできない人物であったからである。第二次労働党内閣の植民地大臣となったシドニー・ウエッブ（この時パスフィールド男爵となった）の労働政策が今もイギリスの旧植民地の労使関係の基本的枠組として生きつづけているのである。

このことからシドニー・ウエッブのことを調べていたので、ニッシュ教授の依頼をよろこんでひきうけた。本稿はその調査結果の報告である。

2

ウエッブ夫妻は多様な活動の合間に、いきぬきのために世界旅行をおこなっている。一八九八年にはアメリカ、ニュージーランド、オーストラリアを九カ月かけて旅行し、一九一一年にはカナダ、日本、朝鮮、中国、マレーシア、インドで十カ月の旅行をしている。一九三二年にはソビエトを旅行している。

これらの旅行のうち、ソビエトを除いては、まとまった本はだしていない。

しかし、その代わり、ベアトリスが日記を残している。この日記は有名であり、現在六冊が出版されている。さらに世界旅行中の日記の部分は現在四冊出版されている。ところが、日本を旅行した部分はまだ出版されていない。

しかし、その部分の日記をみることはできる。日記の原本はロンドン大学政経学院図書館の特別室に保管されている。原本は手書き

のために読みづらいので、それをタイプにうってある。さらにそれがマイクロフィッシュにおさめられており、コピーすることもできる。日本の部分はコピー枚数にして約一〇〇枚にもなる。その中に同志社についての記述を発見した。

3

ウエッブ夫妻が日本に到着したのは一九一一年八月十七日頃ではないかと思われる。この日記は毎日書かれたものではなく何日分かをまとめて書いているために日付けがはっきりしない。横浜港に到着して、鎌倉、東京、伊香保、沼田、軽井沢、長野、新潟、名古屋をへて京都にやってきた。その後大阪、東京、宮島、下関をへて朝鮮に渡っている。

京都についたのは一九一一年九月十四日の晩ではないかと思われる。宮本盛太郎『来日したイギリス人』(木鐸社)の中で、『大阪朝日新聞』九月十六日二面に、ウエッブ夫妻が十四日夜七時三十一分に名古屋から入洛し、都ホテルに泊ったことを報じていることを記述している。さらに『大阪毎日新聞』九月十五日一面に、十四日特派員発で「シドニー来電」を報じていることからしても、九月十四日晩に京都に来たことはたしからしい。

京都についてから、まず第一にしたことは同志社の訪問であった。

同志社についての記述を英文のまま、後にのせておく。

4

この英文の中で書いてあるとおり、ロンドン大学政経学院で学び同志社で指導的な教授の一人となっている人物が、ニッシュ教授のたずねている人である。ロンドン大学の資料と同志社社史資料室の資料をつきあわせた結果、水崎基一であることが判明した。

水崎基一は明治四年九月生まれで、明治二十六年六月同志社普通学校を卒業した。その年八月から明治二十八年まで北海道集治監教誨師となり、明治二十九年四月から三十二年四月まで台湾総督府外事課に勤務した。その後明治三十二年九月から三十四年六月までエディンバラ大学、三十四年九月から三十五年六月までロンドン大学政経学校で政治経済歴史を研究している。ロンドン大学には一年足らずしかいなかったが、同学院の創設者であったシドニー・ウエッブと知り合う機会はあったものと思われる。

同学院の記録によると、一九〇一年から二年にかけての学生リストをみると、全学生総数約一〇〇〇名の中に、八名の日本人名をみつけることができた。G. Ukita, S. Tachi, I. Sugi, M. Ogura, M. Mizusaki, S. Ito, A. Hayao の八名であり、この中に水崎基一の名がのっていた。この翌年のリストからは M. Mizusaki の名はみあたらなかったので一年間だけ在籍したことがわかり、社史資料室の資料とぴったり一致した。

水崎基一はイギリスから帰国後、六年間東洋汽船会社に勤務したが、明治四十一年四月同志社専門学校経済科教授に就任した。ウエッブ夫妻が京都にきた時には、水崎基一は専門学校教頭(明治四十四年四月に就任)になっていた。ベアトリスの日記に書いているとおり、同志社の指導的な教授の一人であって、当時重要課題であった同志社大学設立準備のために奔走していた。この日記の中でも大学設立のことがのべてあるが、水崎から聞いていたものと思われる。『同志社女学校期報』三十一号(明治四十四年十二月二十五日発刊)

によると、ウェッブ夫妻が同志社女学校を訪問したのは九月十六日である。そこで夫妻は茶道をみているが、これには感動しないばかりか、かなり否定的な見方をしたようである。茶道を形式ばってばかげた儀式ととらえている。そのためか女学生の知的水準が低いと教えられたことをカッコの中に書き残している。

それよりも、ベアトリスの印象に残ったのは、公共の中学校よりも組織上うまく運営されている学校組織であったようである。日記の中に書いているアメリカ女性はメアリー・F・デントンのことではないかと思われる。彼女と女子寮の寮母さんや女性の教師や男性教授らが、うまく組織だったスタッフを構成していることを高く評価している。

ベアトリスはハーバード・スペンサーの社会有機体説の影響を強くうけており、文明の進歩の程度をはかる尺度として、その社会がどの程度うまく組織化がなされているかをあげている。同志社女学校のスタッフの組織化がうまくなされているという評価は、文明の程度がそれだけ高いと評価したことを示している。これが公立の学校よりも私立の学校を高く評価する一つの根拠になったように思われる。

ウェッブ夫妻は、その後東京と京都の両帝国大学をも訪問しており、それらと早稲田、慶応、同志社と比較をしている。前者があまりにも政府の干渉を強く受けすぎていることから、「私たちは日本の高等教育や思想が政府の干渉をうけることのない早稲田やその他の私立の機関の自由に多く負っていると考えるものである」と日記の中で書き残している。

九月十六日同志社女学校訪問の後、京都市役所にいって市の社会事業について聞きとりをしている。九月十七日は西本願寺、仏教大学、済世病院をたずね、十八日は京大を訪問している。この夜京大総長主催のウェッブ夫妻の歓迎晩餐会が開かれ、原田助同志社社長が出席している。

九月十九日ふたたび同志社を訪れ、午前九時から、シドニー・ウェッブが「英国に於ける社会問題」と題する講演をおこなった。『同志社時報』八〇号によると、専門学校、神学校、女学校高等学部生徒ら約一〇〇名あまりがこの講演を聞いたとされている。この講演は、水崎基一から急拠依頼されて開かれたものではないかと思われる。この講演の内容についての記録は残念ながらみつけることができなかった。ベアトリスはこの世界旅行の出発直前まで勅命救貧法委員会の委員として活躍していたことから、それに関連する内容をシドニーがしゃべったのではないかと想像される。

この講演会のあと、水崎基一の案内で京都府知事に会い、川島織物工場や貿易商店を視察したあと、奈良へむかっている。

5

ウェッブ夫妻は世界旅行に先だち、あらかじめ日本について勉強することはしていない。旅先のあちこちでさまざまな人と会って、インタビューをしながら情報をえ、それをもとにベアトリスが日記を書いている。同志社についての日記からいえることは、教育に政府が介入しすぎていることを批判し、自主独立に運営する私立学校を評価する素材を同志社が提供したことである。

（大学文学部教授）

ベアトリス・ウェッブの日記からの抜粋

In Kyoto we found ourselves tired and limp, in the heat, and bound to spend the first day or so in resting, in the very comfortable Miyako Hotel.

Our first expedition proved to be to the Doschisha College, a Christian foundation, started thirty or forty years ago by an enthusiastic Japanese, who got money from American philanthropists. One of the leading Professors had been a student of the London School of Economics nine years ago; and he carried us off. The place now consists of a large boys' school, a smaller girls' school and a still smaller college, principally in theloogy, which is aspiring to University rank. We saw most of the girls' school boarding house (where seventy girls were), at which the "tea ceremony" was performed for our benefit. (Etiquette and "tea ceremony" formed an important part of the girls curriculum). We thought the "tea ceremony" a silly business, with its purely arbitrary conventions, and elaborate formalities, leading to nothing but a sip of tea. (We were told that the intellectual standard of the girls was low). On the other hand, there was a competent American woman as Lady Superintendent, a nice-looking Japaneses matron in charge of the girls dormitories, and a number of qualified women as teachers, with the male professors coming in for special subjects-altogether a well-organized staff, in marked contrast with the Government Middle Schools that we had seen.

電話

玉井敬之

私には高校生の娘がいて、よく電話をかけている。またかかってくる。その電話が長いのだ。たいがいはクラスメイトからである。つい二、三時間前まで学校で一緒だったはずなのに、そしてまた明日も必ず会うだろうに、どうしてこんなに電話をかけて話すようなことがあるのかと不思議に思う。しかもその電話のかかってくる時間が、他所から私に電話がかかってくるだろうと思われる頃であり、また、あらかじめ約束をしていて、私の方から電話をかけなければならないときと、重なることが多いのである。こちらもこんなことで文句をいいたくないという気持がある。しかし果てしなく続く娘の電話が何時終るか、待っているときのじりじりした気持は何にたとえることもできない。もう辛抱ができずに怒鳴ってしまうことがよくある。家にいるとき電話は外との唯一の通路である。それが塞がれるというのは、言論の自由の妨害ではないか、と私は思う。しかし、こんないかたは娘はもちろん家の者にも受け入れられない。私のいいかたが大袈裟だというのである。

しばらく前にこんな話を友達にしたら、割り込み電話というのがある、あれを電話局にいってつけてもらったらいい、あれは便利だと教えてくれた。なるほどと思った。なんでも相談はするものである。そこで早速割り込み電話を申し込んだ。四、五日してそれがついた。これだと話中に他から電話がかかってきても誰からであるかわかるし、長電話のコントロールにはなるだろうと大いなる期待をいだいたのである。

しかし、期待はたちまちはずれた。それだけではなくたちまち後悔をしたのである。私が電話をしているとサインが送られてくる。他からの電話がかかっているのだ。相手に割り込み電話がかかってきていることを告げ、ちょっと待ってほしいという。相手にもそれが伝わっているらしく、それでは、と話が肝腎なところに入っていても遠慮をしてきってしまうことが多いのである。先方からかかってきたときには、これは大変に失礼なことであろう。そんなときの電話は、たいがいあまり重要でないものか、土地やマンションの宣伝で私にはあまり関係のないものが多いのだ。腹が立ってくる。そこであらためて相手に電話をするのだが、もうそのときには何だか双方ともに話がはずまず、はなはだ要領をえないことになってしまうのである。

それからは割り込みのサインがあっても応じないことにした。相手から電話がかかって

いるのではないかといわれても、いいんだ、といってそのままにしておくことがしばらく続いた。しかし話が終って受話器をおいたら、あの割り込みは何だったんだろう、誰からだろうと気になって仕方がなくなるのである。強いてあれはセールスだと思うようにするのだが、ひょっとしたらという気持をおさえることができない。今度はやりきれなくなってくる。何かがお腹のなかにたまったような変な感じになる。そんなことで割り込み電話は一月程で取り外してもらうことにした。完全な失敗であった。馬鹿らしいことをしたものであった。

この頃は多機能の電話やテレビ電話のようなものもあるが、今のところはまだ姿が見えないものが多い。声だけが一人歩きをするのである。

古くからの親しい友人に電話をかける。受話器に向って喋りだすと途中から、「一寸待って下さい、変わりますから」という。おや、と思い、すぐに、ああ、今のは息子さんだったのかと気づく。つい先頃まではまだ少年の声だったのにと思うと何だかおかしい。奥さんと話をしているつもりが娘さんだったりする。逆の場合もあって照れ臭くなる。もう皆、そんな年ごろの息子や娘を持っているのだ。しばらく前からこんな経験をするようになった。声だけでは見当がつかないのである。

しかし、私は学生に電話をかけることが好きではない。ことに女子学生のところにかけるのは好きではない。どうしてもかけなければならないときは憂鬱である。あれこれとためらい、しなくてもすむ方法を考えるのだが、どうしても避けることができないときもあるのだ。大袈裟ではなく、一大決心をして受話器に向い、ボタンを押す。平静ではない。なるべく話中のサインが返ってくるようにと祈るような気持だ。しかし呼び出し音が鳴っている。電話をきろうか、まだ迷っているのだ。相手が受話器をとったようだ。ほっとする。決心がついた。

もう何年も前のことになるが、ある女子学生に電話をしたことがあった。母親のような人がでてきた。「○○子さん、いますか」といって私の名前を告げると、その瞬間、「かんにんしておくれやすなあ」と実にまったりとした声が伝わってきた。身体全体が甘くつつみこまれるような声であった。思わず身体をそらして後じさりをしていた。私は「いや、ま、まあ……、ええ、いや、まあ、」とか何とかわけのわからぬことをいって電話をきっていた。それは本当に柔かい声であった。しばらく呆然としていた。あれは一体何だったのだろうか。何が何だかさっぱりわからなかった。事態がよく呑み込めなかった。このとき私は京ことばの怖ろしさと甘さとを全身で感じていた。あんなねばりつくような甘い声があるのだろうか。結局、私はその女子学生と電話で話すことができなかったのである。私が断念したのである。学会などで東京から来た友人が京ことばを聞いていると、心が安まるとよくいうが、それはまだこの京ことばの甘さと怖ろしさとを知らないからである。

向うで呼び出し音が鳴っている。受話器がとられた。「もしもし」と父親らしい声。「もしもし、××さんのお宅ですか」と私、「はあ、そうですが……」、「△△子さん、おりましたらお願いします」「あんた、だれ」、途端に声も言葉つきも変るのだ。警戒されているのである。胡散臭いボーイフレンドと思われ

たようだ。「わたし、玉井というもんですが……」、こういうときには出来るだけ慇懃に丁寧に名前を告げなければならない。「一寸待って」と受話器を置く微かな音がして、「△△子、玉井という人から電話……」という父親の声が聞こえてくる。しばらく間をおいて、ばたばたと足音がして「せんせえ、すんません……」とようやく可愛らしい声を聞くことができるのである。この電話の後、そこの家では「お父さん、どんないいかたをしたの」とか、「今のは先生やったのか、なんで先生の名前ぐらい家にいっておかへんのや」とかの、ちょっとした親子喧嘩、家庭争議がおこっているのではないかと私は心配する。いや、きっとそうに違いない。

こんなことをある席で話したら、同じような経験をしている人がいるとみえて、何人かが共感してくれた。しかしある教授からは、そやけどお前のところはもっと困るといわれたのである。私にはもう一人娘がいて、常々その教授にお世話になっている。教授がどうしても娘に電話をしなければならないときは、やはり憂鬱だそうだ。呼び出し音が鳴っている間は落ち着かないそうだ。娘が出て受話器をとったときなどはほっとするという。これは私にもよくわかる。

私は晩酌を欠かさない。好きなテレビの時代劇をみながらの晩酌はなかなかに楽しい。そこへ電話が鳴った。ひょいと腰を浮かしそうになるが、家内が受話器をとった。受話器を耳にあて、しきりに頭を下げながら、「はいはい、いつもお世話になりまして、いいえ、おります、一寸お待ちください」といっているのだ。私にかかってきたものと思い、ああ、今ええとこやのに、と残念になってくる。ちょうど二枚目の俳優が三葉葵の印籠を取り出して、「ええい、控えろ、ひかえろ。この紋どころが目に入らぬか、このお方は……」はと見得をきっているところなのだ。胸がすうっとする場面である。惜しいところである。しかし受話器を通してこういうところを聞かれるのは、やはりまずいだろう。沽券にもかかわる。あわててリモコン操作で音量を小さくし、起ち上ろうとすると、家内は受話器を手でふさぎながら、「××せんせえ」と声を殺して私にいう。娘の方にかけてこられたのである。しかし、残念だが「水戸黄門」は諦らめねばならないだろう。電話を通して「水戸黄門」や「暴れん坊将軍」を、私はあまり人に知られたくはない。

電話の当事者はかける方とかけられる方だけである。そこに第三者が介入する余地はまったくないといっていい。しかし、あるいはそのために、かつて平野謙が喝破した女房的リアリズムの眼からみれば、かける方には深刻な精神の葛藤が、かけられる方にも突如として破綻を含んでいなくもない家庭劇が、そこから展開することにもなるのだ。

やはり私は学生に電話をかけるのは好きではない。ことに女子学生にかけるときは、ユーウツである。

（大学文学部教授）